MMOしんどろーむ　－In Ragnarok Online－

倉石さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＭＯしんどろーむ　－Ｉｎ　Ｒａｇｎａｒｏｋ　Ｏｎｌｉｎｅ－

【Ｎコード】
Ｎ３９０８ＢＡ

【作者名】
倉石さん

【あらすじ】
現世の社会の如く腐った天界の社会体制のお陰にして生まれながらに運の無い主人公は大学２年の猛暑日ついにその人生に幕を下ろしました。
今まで生きた人生で楽しめたのはネトゲだけ。
そんな主人公が生甲斐としていたのはラグナロクオンラインと呼ばれるＭＭＯＲＰＧでした。
重度の廃人プレイヤーである主人公は神様の手によってようやく幸運と呼べるべき超展開である、自ら望む世界への転生をたった１つ

の願い事と共に果たします。
当然の如く選んだラグナロクオンラインの世界で、主人公はどんな人生を歩んでいくのでしょうか。

あ、ちなみに主人公は僕っ子で糞が付くレベルで腹黒です。
お願い事も超が付くレベルのチートです。
はいはいテンプレテンプレな展開に吐き気、目眩、頭痛などの諸症状を催す方は、相当な覚悟を持って我慢して読むか、ブラウザの戻るボタンをご利用ください。
またこの小説を書いている人間は実際に超が付くほどのヘビーネットゲーマーであるため、専門用語等、あれよあれよと飛び交います。
一応其々説明の為の（）書きおよび――――書きをしていますが、あ、サーセンちょっとそういうのは……って方はこれまた相当な（後略）。

プロローグ（前書き）

あらすじ読んでね！

プロローグ

やぁやぁ紳士淑女の皆様方、貴君らがコレを春夏秋冬いつ手に取るか等僕にわかるはずもないので、寒暑未定な日々を各々お過ごしの事だろうとだけ言っておこう。
まぁ、こうして日本語にて綴っている以上はこれを判読できる貴君らは恐らく通年で春夏秋冬が巡る日出づる国の出身であろうと推測しての事である。
さて、僕にわかる事と言えば、貴君らがコレに目を通しているという事はすなわち貴君らは一般的に囁かれる所の暇人か、若しくは余程の物好きである、という事程度であろうか。
だが期待はしないほうが身の為だ。
いや、精神の為だと述べた方がこの場合適切かもしれないが、まぁ僕にそんな微細云々に気を配る程の文才は無いので適当に聞き流してほしい。
さて、端的に述べようか。
これからこの古書にて綴られるのは、一人の手の施しようも無いダメ人間が、手の施しようも無い突拍子もない出来事に巻き込まれていく、実の程を弁えず仰々しい単語を遣うならば紀行文、といった所だ。

ただ、これを読むに当たって貴君らにお願いしたい事は、これは僕の妄想、もしくは白昼夢の一種、夢物語、寓話、逸話、童話、神話、まぁそんな語群の意味の些細な違いなど博識とは程遠い知識しか持ち合わせていない僕にとっては一種の言葉遊び、またはっちゃけて言うのならただの見栄なのだが――どうにも話が脱線し易い、こうして自らの思考に耽溺する自分に酔っているのだからどうにも僕はやはり救い様がない――結局の所そういう物なのだと思ってこの話を読んでほしい。

間違っても、ウホッいい転生物、俺も転生チャンス来るまで親の脛齧って自宅警備すっか、などという発想は抱かないで頂きたい。
僕は国家転覆を企み暗躍する某組織――何を指すかは御想像にお任せする――という訳でもない、ただの自分がそう有ったという存在の証明の様な物を残す為にこれを記しているに過ぎない。
この本によってニから始まる自由業が増え、結果的に将来の我が母国の経済に少なからぬダメージを与える等という結果を招くのは甚だ遺憾である。

ま、下らない前置きはこのくらいにして、まずは僕がそんな突拍子もない出来事に巻き込まれた、事の起こりから綴ろう――。

――それは、とある日射し照り付ける夏の日の事であった。

プロローグ（後書き）

はい、一ヶ月ぶりに投稿したかと想えばまさかの新作です。
もう片方更新しろっつーあれですよね、はい。
だって書きたくなっちゃったんだものっ仕方ない！
ってかまぁほら言い訳っていうかね、お休みの理由は卒業論文っていうかね？
誰に言い訳してんだろうね。
数少ない読者様だね！
ってなわけで、まぁ皆様方楽しんで、もしくは軽く暇でも潰していって頂ければ、至極幸いでございます。

死亡→転生

「……あっちぃ」
摂氏３８度を超える猛暑の中、照りつける太陽に死ね死ね死ねとストライクな恨言を呟きながら僕はコンビニへ向かいダラダラと歩を進めていた。
僕の愛車である――――二輪人力車、ようは自転車だが――――４代目流星号は自宅であるアパートの駐輪場からまたも姿を消していた。
昨今の餓鬼共というのはどうにもヤンチャが過ぎる様で、僕の自宅の道路は小中高生の頻繁に通る所謂通学路であり、どうにも自転車の誘拐事件が多発する地域に当たるようなのだ。
マウンテンバイクや原動機付自転車と違い、変速切り替えも出来ないシンプルイズザベストなママチャリである我が流星号はどうやら余り目立たない所が逆に誘拐犯達にとっては格好の餌食であるらしく、此方に引っ越してき大学入学から大学２年の現在に至るまでに既に３回の代替わりを果たしている。
余談だが、僕の地元では自転車の事をケッタマシーンなどと呼ぶ事があるのだが、これは大学１年で悪友にうっかり口を滑らせてしまったせいで１ヶ月間永遠と馬鹿にされるという自体に相成ったためそれ以来は自重している。
どうでもいい？そりゃそうだよな。
さて、それでもシンプルな自転車を購入し続ける理由は一重に安いから、である。
そんなこんなでこうして昼飯を買うのにも１０分近い徒歩を経なければならないわけであるのだ。
まったくツイテいない。

いらついた気分のまま、コンビニの引くと書かれたダブルドアを敢えて押してあける。

「らしゃーせー」
やる気のない店員の声と共に肌を包む冷え過ぎた空気で脳の血管が収縮し微かな頭痛となって僕を襲う。
適当なオニギリを２つ程と５００ｍｌ紙パックのバン○ーテンココアをカゴに放りこむ。
バンホー○ンココア――――世界のクオリティである。
ご多聞に漏れず甘党である僕も愛飲しているが、某悪友は糖尿病になるぞ、とか太るぞ、とかぐちぐちと煩い。
良いんだよいくら食っても――――この場合飲んでもと言うべきか――――太らない体質なんだから。
目的の品を入手し、さっさとレジに向かうが、昼時という事で当然の如くレジには軽い列が出来ている。
レジが２つ存在するにも関わらず、片方しか解放されていないのもその原因の一端だろう。
上機嫌で品出しを続けるチャラ男店員に侮蔑の視線を送るが気付く様子はない。
５分という列に並んでいると大層長く感じる時間を経て僕の順番がようやく来る。
しかしその瞬間にふらふらとドヤ顔で列の前に入る汚らしい風体のおっさん。
「っちょ……」
一言言ってやろうと一時は思うのだが、面倒事になる事が目に見えているためそのままだんまりを決め込む。
店員もなんか言えよまじ。
と店員を見るとこれもまた股の緩そうな厚化粧のギャルである。
言うだけ無駄か……。
悪い意味で日本人らしい発想を常日頃から遺憾なく発揮しているのが僕である。
少しして、やたらと声のでかいおっさんが去りようやく順番が回って来る。

僕は不機嫌さを隠す事も無しに、心の中で色々な物に対し、死ね、と悪態を付き、カゴを乱暴にレジに置いた。
一瞬ギャルが隠す事もなく此方を不機嫌な目で見るが、僕の不機嫌な顔を見て品物に向き直った。
「……ちっ、温めますかぁ……？」
「……は？」
「あ、すぃません間違えましたぁ、ストローお付けしますかぁ？」
「いらないっす」
おにぎり温めるとか斬新ってレベルじゃねーぞ。
しかも外に出りゃ３８℃だぞ。
ガリガリ君なんざ買った日にゃ帰宅までにジュースになってるレベルだぞ。
等々、盛大に心中で突っ込みを入れて代金を支払い品物を受け取る。
「あーじゃーじゃーしたぁ」
てめーは某希少価値蒼髪チビか。
生まれ変わって出直してこい。

押すと掛かれたドアを引き、寒ささえ感じるコンビニを出ると一瞬は心地よい暖かさを感じる。
だが一瞬でそれはまた元の糞だるい猛暑に変わる。
「……あー、だりぃ、さっさと帰ろ。」
少なくとも自宅に付けば丁度良い具合に冷やされた自室と、自キャラ達が僕を待っている。

―――ＲＯ（Ｒａｇｎａｒｏｋ　Ｏｎｌｉｎｅ）
それは僕にとってのネット時代初期、ｗｉｎｄｏｗｓ９８の誕生が世間やネットを賑わせ、フラッシュムービー等が大流行していた時代――――軽く１０年程前だろうか――――にサービスを開始されたＭＭＯＲＰＧ（多人数同時参加型オンラインロールプレイングゲーム）であり、当初ＵＯ（ウルティマオンライン）等と並び日本最大クラスの規模を持ったネットゲ

ームである。
その人気ぶりはＵＯと違い現在に至って続いており、プレイヤー人口は全サーバーで常時接続軽く数万人に及ぶ大人気ゲームだ。
独特な２．５Ｄの世界と可愛らしいキャラクターや重厚なやり込み要素が特徴である。
レベルを上げ装備を集めとにかく強さを求めるも良し、多種多様で数え切れない程のクエストを進め、その物語の背景を知るも良し、ネットの中で深い人間関係を求めるも良し。
僕は専ら強さを求め、対人戦や攻城戦にやっきになっていたクチのプレイヤーだが、人間関係ではＲＯで知り合い、オフ会――――ネットで知り合った人間同士が現実で出会う会合――――で出会い結婚までしてしまうような奴すらいるそうだ。
まったく僕からすれば正気の沙汰ではない。
まぁ度重なるアップデートによって現在ではご新規さんにはかなり敷居の高いゲームとなっているのだが、かく言う僕はクローズドβテストからの超古参プレイヤーである。
大きな声では言えないが、本鯖（某韓国会社が運営する正規のサーバー）にうんざりしてエミュ鯖（エミュレートサーバー：ラグナロクのサーバーデータを運用し、一般人が開放する個人サーバー、運営は黙認気味だけど違法だよ☆）にちょくちょく浮気をしていたこともある。
つい最近あった三次職の実装やＲ化と呼ばれる大規模アップデートの為にいまは本鯖の方ですっかり落ち着いているわけだが。
と、まぁつまり僕はそんなオンラインゲームにどっぷりはまる、口に出すのは若干憚れるが軽度の引き篭もりである。
帰宅してから狩りに行く場所――――といってもレベルはほぼ全キャラカンスト（本鯖ではＬｖ１５０がＭＡＸでありカンストとはそのＭＡＸ状態を指す）であるため、専ら金目当てのモンスターやボスを狩ったり、友人の手伝いであったり――――を思い浮かべつつ、ぼーっと横断歩道を渡る。

その時であった。
急激に体感時間の進みが遅くなる。
視界の右端に映るのはスピードを緩める様子の無い１０トントラック。
僕はたまにＦＰＳ（ファーストパーソンシューティング：一人称視点シューティング）もやるのだが、そのプレイ中似たような心境になった事がある。
足元に不可避のタイミングで、Ｇ４００手榴弾が白い放物線を描いてカンカラカン、と音をたてた時等だ。
そんな時僕はいつもこう漏らすのだ。
「……あっ、やべこれ死んだ！」
そして体がゆっくりと宙に舞う感覚を覚えながら、僕の意識はブラックアウトした。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

―――はっはっは！思えば糞みたいな事ばかりの人生だったぜ！
親の言い成りになりつつ言われたとおりの高校、言われたとおりの大学を進み、楽しみと言えばネットゲームだけ。
友人も数えるほどしか出来ない。
恋愛？聞かんでもわかろうに。

そんな人生。
きっと僕のリアルラックは一切使用されていなかったのだろう。
でなければ、こんな事にはきっと成らなかったはずだ。

――――おい、起きろおら。
「……あ？」
「あ？じゃねーよてめぇ、年上には敬語使えおら」
目が覚めたら、頭に光るわっか付けた天使？がいた。
フォルムとしてはあれだ、フランダースの犬のラストシーンで出て来たあれ。
えんじぇるちゃん。
そういえばフランダースの犬のパロディでフラダンスの犬とか言うのあった気がする。
まぁどうでもいいが、とりあえず眼の前のそんな純粋無垢な見た目した神秘的な存在がぞんざいな言葉使いで僕を蹴りつけている。
はい、キックです。
しかも頭。
……蹴りくれてんじゃねーよチビスケが。
ぼそりと呟いた言葉が聞こえたらしく、天使（仮）の蹴りの威力が3ランク（当社規格）くらいあがった。
ひとまず置き上がって辺りを見渡す。
うん、あるのは一面真っ白な世界だけ。
「で、なんぞこれ」
「あの世」
「ふーん、そっか」
「うん」
「いや軽過ぎンだろおいっ！」
天使に乗り突っ込みを入れたのは世界でもきっと僕くらいのもんだろう。
と知らんが勝手に予想する。

世界ってのぁなー、狭めーもんなんだーよー。
無駄に〇ン〇ン牧場の主っぽく祖父が言って居たのを思い出す。
だが現実は甘くない、するっとかわされた。
「てめー何ちゃちゃくれよーとしてんだおら、調子こいてっと奥歯ガタガタいわすぞ」
「わかった、謝るスマン、許してくれ、だからもうちょっと見た目にそった喋り方してくれ、僕の中の天使ちゃんのイメージがくずれる」
「お前の中のイメージなんてどーでもいいんだよこっちはよぉ！忙しいんだから早くしろや！」
そう言って、いつの間にか俺が纏っている白い死装束の襟を掴み、天使（暫定偽）はどこにそんな力が有るのか放り投げた。
というか今更だけど、体感的に言うなら僕が軽くなったのか。
うわーい！体が羽のようだよー！うふふー！
バトミントンの羽をへし折って全力で打った時のような勢いで――――そうするととてもよく飛びます：豆知識――――真っ直ぐ放り投げられた僕は、突如目の前に現れた真っ黒い穴に吸い込まれていったのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「で、なんで幼女なんだよ」

気が付くと目の前には真っ白なワンピースと、神秘的っぽい、オーラっぽいものを纏った幼女が立っていた。
どうやら僕は腹這いで転がされているようだ。
「ようじょではありません、かみです」
「いや、神でも幼女なもんは幼女だろ」
「いいからきけかす＾＾；」
「あれ……いまなんか幻聴聞えた……」
ついでになんか顔文字っぽいのも見えた？
あれ見ると煽りだと思っちゃう僕って末期？
「こほんっ、さて、まずあなたにあやまらなければならないことがあるのです」
「お、おう？」
僕はシュールすぎる状況の理解を取り合えず棚に上げまず情報を頭に詰め込む事にした。
「あなたがうまれたときなんですけどねー、じつはうんのようそをつけわすれちゃったらしいんですよーしたっぽがー」
「……は？」
「つまりーあなたにはほんらいひとうまれてくるときにもってるはずの、うんがなかったんですよー」
「うんって……らっく？」
「……はい、えっとぉ、そのーつまりー」
「……」
「……てへぺろ☆」
「死ね」
色々納得したけど色々納得できないなう。
「まぁそうおこらないでくださいよー、だからわざわざこうしてたかがにんげんふぜいのあたなにわたしがしゃざいをしにきたんですよー？」
「まぁ下のケツを上が拭くのは当然の事だろ、社会的に」
「……ちょうしのんなよだぼが＾＾；」

「あれ、また幻聴聞えた……？」
どうやら幽霊という奴は耳が悪いらしい、きっとそう。
「んんでですねー、かわりといっちゃーなんなんですがー、あなたのてんせいさきをあなたのいしでじゅうにきめていいですよーっていうーそういう……あれです、さーびす？」
「いや疑問形で言われても」
「しかもいまならおとくなおぷしょんさーびすつきっ！きおくさくじょはなし！さらにてんせいさきはあなたのおもうまま！さらにさらにってんせいさきでのねがいをなんでも１つだけかなえてあげちゃいます！」
「人の話きかないんだね、神様って」
まぁ、要点をまとめるとこうだ。
僕死亡→実は運付け忘れちゃったテヘペロ☆→転生先選んでいいよ！→転生したあと何でも１個叶えちゃう☆
テンプレ展開ｋｔｋｒ――――来たコレの略である――――！！！
しかもチート設定の香り。
「ちょっとまって、少し考える時間くれ……！」
「だが断る」
おいこいつまた口調変わったぞ。
「だってこれからすぐかみさまがあつあまるおちゃかいあるんだもんー」
「お前人の人生適当に狂わしといて御茶会優先か」
「くるわせたのわたしじゃないもーん、したっぱだもーん」
どうやら現代において企業体勢が腐っているのは人間社会だけではないようだった。
「はい、あと３０びょーねー」
「短っ！！！！」
え、え、ちょっとまてまて、転生さきっつったって、元の世界なんて糞喰らえだし、これといって転生したい世界なんて……あ、あったわ。

「おk、決まった」
「おーはやいねー！けつだんがはやいひとはすきよー？」
僕にロリコンの気はねーよ、可愛い物は好きだが。
「ラグナロクオンラインの世界がいい」
「うわーｗｗｗ（ｗとは俗に、笑いの意味を示す、読み方は人次第だが草、ワラワラワラ、ウェウェウェ、ワウワウワウｅｔｃまた一部煽り、ドン引き、中傷等に用いられる）ネトゲ廃人乙＾＾；」
余計な御世話である、っていうか知ってんのかこいつ。
「かみさまはしらないことないんだよー☆」
「地の文を読むな」
「うーんそんじゃそのねとげ世界がいいんだねーおっけー！まっかせなさーい！」
幼児体型で無い胸を張りながらドンと胸を叩く幼女を見る。
「あそうだ、ねがいごとはー？」
あ、やべ考えてなかった。
どうしよう、この際だから有る程度チート設定でいいかなもう。
だがあまりチート過ぎる設定でもきっと第２の人生を楽しめない。
運を貰えなかったせいで前世ではまったく楽しい人生を送れなかったのだから次くらいは……あ、運か。
「そうだ、丁度いいや、運の無い人生を送らされた代償ってわけじゃないけど、次の人生ではこれ以上ないくらいリアルラックに溢れた生活が送りたい！」
「へーそんなのでいいんだ、おっけー、そんじゃこれいじょうないくらいのりあるらっくね！ってそれけっこーえぐくねー？」
「何でもいいっつったろーが」
そういえばまた口調がさっきから何度かひどい物になっているがもはやつっこむ気力もうせた。
「いやまぁいいけどさーべつにー？そんじゃまぁ、いきさきもねがいもきまったね！」
そう言うやどこから出したか右手に小ぶりな木槌を握りしめ、大き

く振りかぶる。
え、まじで？そういう感じの射出なの？
「いってらっしゃーい！」
是非の言葉を挟む間もなく、さも当然の用にその小槌は頭に振り下ろされ、本日（？）３度目になる意識のブラックアウトを、僕は受け入れるのであった。

転生→幼女（前書き）

あー世界設定とかねっと関連設定が続く―！
今はまだッ我慢の時ッッ！！

転生→幼女

「ぷぎゃあああああああああああああああああああ」
じゃない間違えた。
「おんぎゃーぁあぁあああ」
ありふれた産声と共に僕は生まれた。
先程、謎のダークホールにＨＩＯ（ホールインワン）された記憶も新しく、待ち時間的な物が存在するだろうと構えていた僕にとっては多少驚きの急展開だ。
さてそれより驚きの展開は周りの騒々しさだ。
「う、生まれましたよ奥様っ！！元気な女の子ですっっ！！」
「旦那様にもお知らせしないとっ！ほらあんた突っ立ってないで走る！」
「は、はい！お知らせしてまいりますー！」
「可愛いわー……きっと奥様に似て美人に育ちますよ」
そうか、転生するとはいえ性転換はしなかったようだ。
え、男じゃねーのって？僕は前世でもれっきとした女だったが？
まぁ喋り方やら行動やらでどうにも周りからの扱いは男のようなものだったが。
某悪友を含めた身の周りの友人も殆ど男だったし。
っていうか女相手は友達になるっていうレベルの問題じゃなかったしな……まぁその話は今はいいとしよう。
生誕直後のせいか目が開かないため周りの状況はわからないが、数人の産婆と思われる女性達の声が聞こえる。
産湯の暖かさに包まれたと思ったら今度は体を柔らかな乾したての香り漂うタオルで拭かれる。
あれよあれよと言う間に身綺麗にされつつ僕は一人の女性に抱かれた。
「可愛い……、ほらみてスルーズ、貴方の妹よ？」

「うわぁーっ！かわいいですね、おかあさまっ！」
不思議な暖かさを持ったその女性の腕の中で、僕は急激な眠気に飲み込まれるまま、意識を手放すのだった。
後に知った事だが、ミッドガルド大陸ルーンミッドガッツ王国の港町イズルードの町長宅の二女として僕は第二の生を受ける事となったようだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

正直な話、赤ん坊時代はつらかった。
飽きたと言えるはずもなく、数か月もの間母親から与えられる母乳を飲み続け、トイレに行きたくとも発達しきっていない声帯では泣きじゃくることしか出来ずに汚物は垂れ流しでおしめを替えて貰う毎日。
たまに読んでもらえる本は何時も同じ北欧神話を題材とした世界創造の御伽噺ばかりで記憶力に正直自信が無い僕でも流石に内要を完全に暗記してしまった程だ。
そんな辛い時代を耐え抜き、2歳になってようやく立って歩いて下っ足らずにも会話が出来るようになった。
さてまずは僕の家族構成だが、まずはイズルードの町長兼、剣士ギルドのリーダーを務める父シューレン、その妻シヴ、僕の姉に当たるスルーズ、そして二女である僕、ウルだ。

さてここで名前の解説、というより推察に入ろう。
僕も伊達に長い事ラグナロクオンラインというゲームをやっているわけではない。
ご多聞に漏れず授業中に電子辞書やら広辞苑やらで北欧神話に付いての見識を無駄に深めた一人なのだ。
というのもラグナロクオンラインというゲームは北欧神話の世界をベースに構成されている。
諸説あるが、一般的にミッドガルドは北欧神話における死を逃れられない存在、つまり人間の住む世界を指すミドガルドから来ている。
またミドガルドとは大樹ユグドラシルに支えられた大地であり、中央には主神にオーディンを据えたアースガルドと呼ばれる神族の国が存在する。
またミドガルズ蛇と呼ばれる世界を囲む大蛇を隔てたアースガルドの周りには巨人と氷と死の国であるニブルヘイムが存在すると言われる。
これも諸説あり、ニブルヘイムは大樹ユグドラシルの根基に存在するという説とミドガルドの周りに存在するという説があり、所詮は伝承であるといった所なのだが。
まぁ、ここまで言っておいて何なのだが、ラグナロクの世界はベースとしてこの北欧神話を摘要しているだけであり、その世界観に完全に準じた世界ではないのだと言う事を覚えておいてもらおう。
さてその北欧神話において、シヴとはかの有名な巨人トールの妻であり、スルーズとはその娘に該当する。
またウルとはシヴがトール以外の誰か――――不明とされている――――と作った俗に言う種違いの子であるとされている。
はっはは、きっとそこまで深い意味を持たせているわけではないのだろうが、それにしても穏やかな名前でない事はわかる。
だが母シヴはとても父以外の人間とその……そういう事をするような人間ではないのはこの2年間娘をやっていれば痛い程痛感出来る。
若干天然で、乾した藺草の様な暖かな香りを漂わせる母と剣士ギル

ドのリーダーである豪快な性格の父は共に４０を超えていると言うのに未だ新婚の香漂うバカップルである。
たまに見ていて両親出なければ蹴り飛ばしたく成る程のいちゃつきっぷりだ。
また姉のスルーズも厳しくも優しい、妹想いの姉であり、僕の過程は概ね幸せ一杯の平和その物であると言えるだろう。

さて、歩けるようになってからというもの、残念ながらまだ外出を許可されていない僕はまず家中の本という本を読み漁った。
絵本から学術書、歴史書、とにかく僕には情報が足りなかったからだ。
なんせ僕は戦闘狂とも言えるほどキャラの強化にしか情熱を注いで来なかった人間であるため、ダンジョン名やモンスターの生息地、ドロップ、経験値、装備の組み立て、カードの効果ｅｔｃは理解していても、このミッドガルドの世界観など目を向けた事も無かったからだ。

―――そうそう、このラグナロクオンラインを語る上で欠かせない要素を説明するのを忘れていた。
各種装備品に１~４つ存在するスロット、およびカードシステムについてだ。
防具なら最大１つ、武器なら最大４つ、カードを装着できるスロットというものが存在する。
そしてこの世界のモンスターは一匹残らず、スライムレベルの雑魚からボスモンスターに至るまで、そのモンスターの名前を冠した、効果を持ったカードをドロップするのだ。
たとえばそのスライムレベルである所の代表的雑魚モブ、ポリン。
横長の楕円を描くピンク色のぷにぷにとした容姿と可愛らしい表情はラグナロクオンラインを代表するマスコットキャラクターであるとも言えるが、そのポリンのドロップするポリンカードは鎧のカー

ドスロットに装着する事で、基本ステータスであるＬＵＫを2上昇させ、また中ボスであるところの唯一回り大きくなったポリンの容姿を持つマスターリングのカードと共に装備する事でＦｌｅｅ（回避力）が１８上昇する。
一般的にこういったカード効果をセット効果と呼び、２枚のセットで効果を発揮する物も有れば5枚のセットをそろえる事で効果を発揮するカードも存在するのだ。
また基本ステータスにはＳＴＲ、ＡＧＩ、ＶＩＴ、ＩＮＴ、ＤＥＸ、ＬＵＫの６項目が存在し、各々小難しい効力を持ってはいるのだが、簡単に言うならばＳＴＲが力、ＡＧＩが素早さ、ＶＩＴが耐久力、ＩＮＴが知恵、ＤＥＸが技術力、ＬＵＫが運、といった所だろう。
詳細の効果は随時必要に応じて説明して行こうと思う。
問題はこの世界に、レベルやステータスといった概念が存在するのかどうかだが、ラグナロクオンラインという世界である以上は存在していなければ成り立たない基礎中の基礎である情報であるため恐らくは何か存在しているのであろう。

さて、話を戻すが、そんなステータスの持つ影響値や計算式、数千匹存在するモンスターのそれぞれのカード効果を全て暗唱出来るレベルの廃人である僕だが、必用不可欠なクエスト以外には全く触れてこなかった上に、そのクエストの会話でさえもＥｎｔｅｒキーを連打しすっとばすという典型的な実用性重視プレイヤーであったため、この世界で常識であるような、たとえばルーンミッドガッツ王国という1つの国の成り立ちや国王の名前、またその所属する町など、そういった情報が残念ながらすっぽり欠落しているのだ。
まぁ普通に考えたら生まれて2年しか経っていないような幼女がそのような知識を持っている事自体が異常なのだが、自分の好きな事にはとことん打ちこめる性格である所の僕は貪欲にこの世界に関する知識を詰め込んでいったのだった。

自宅の書庫で床にチョコンと座り込み、ミッドガルズ大陸の地図を眺めている僕にスルーズが話しかける。
「ウルはそんな難しいご本もう読めるんだねぇ……すごぉーい！」
「えへへっ、れもこれはたらのちじゅだからそんなにむじゅかしくないょ？」
スルーズは僕より3歳年上で今年で5歳になるが、勉学よりもむしろ武術に深い興味を抱いている様で、文字を読む事は有る程度出来るものの、難しい文字を読んだり、文字を書いたり等はまだあまり得意ではないようだった。
僕は歳相応に見えるような喋り方（まだ舌っ足らずなので難しい事を喋っても歳相応に見えてしまうのだが）でスルーズに言い訳をした。
実際は地図を見ながら懐かしい――――2年もゲームのＲＯの世界に触れていないのだ、これが現実ならヘビープレイヤーの僕は死んでいてもおかしくない、いやまぁ実際死んでるんだが、それはそれとして――――気持ちに浸っていたのだが。
「私はね、明日からお父様におけいこしてもらうんだ！」
「ふぇ～、スルーズおねえさましゅごいね！」
「でしょ～っえへへっ」
あぁ、スルーズ可愛いよスルーズ、父に似てぱっちりくりくりした瞳と整った顔立ち、歳の割には少し長いロングのサラサラした黒髪、歳相応の無邪気な笑顔。
可愛い物を愛でるのは万物の理である、と僕は自負している。
そういう僕は母に似てこれまた整った優し気で大人しい顔立ちと、うなじ付近でセミロングの艶やかな黒髪を白いレースのリボンで緩く纏めた愛らしい容姿であるのだが。
まさか鏡を見た時転生した自分の姿に萌えてしまい悶え苦しむ事になるとは思わなかった。
生前の僕はどちらかというとボーイッシュな装いだったため、そのギャップも一際である。

この辺にもやはりあのカミサマモドキに依頼したリアルラックが関係しているのだろうか。
それはそうと5歳で漸く武術指南か。
どうやら僕がこの目で、この広い広い、現実と化したＲＯの世界を見て回れる様になるのは、当分先の事になりそうだった。

幼女→冒険者

自宅に存在する図書をほぼ読み切ったのは僕が４歳になって数カ月が経った頃だった。
我が家は武術に幅を利かせた家柄であった事もあり、蔵書量もそう大した物ではなかったのだ。
そして取り合えずわかった事は、今の時代は未だ魔王モロクが復活しておらず、首都プロンテラ、衛生都市イズルード、魔法都市ゲフェン、森林都市フェイヨン、砂漠都市モロク、貿易都市アルベルタ、海底都市コモド、先住民族が住まう都市ウンバラが、後にその子孫が七王家と呼ばれる七名により平定され、ルーンミッドガッツ王国と呼ばれる様になってから数百年が経った頃らしいという事だ。
ルーンミッドガッツ王国の王座は七王家から１２歳以上の王候補を立て、その中から選び出されると言う形式を取っているらしい。
初代王ルーンミッドガッツ王はゲオルグ王家のゲオルグ・トリスタン１世、現在はゲオルグ王家３６代目に当たるゲオルグ・トリスタン３世がその王座に付いているが、長い間病床に伏せっているという噂で、長らく大衆の前に姿を現していないそうだ。
そのためゲオルグ王家を含め、バルター家、リハルト家、ネリウス家、レベンブルグ家、ウィグナー家、ハイネン家の七王家で次代王の選出を行っている真っ最中だとか。
またこの王の選出には毎回嫌という程騒乱が付きまとうらしい。
というのも、王家には呪いが存在しているとかしていないとか。
ルーンミッドガッツ王国の建国にあたり在ったと言われる千年にも渡る戦争が終了し、その混乱の最中、ミッドガルド大陸をぐるりと取り巻く程の大きさを持ち、大海に横たわっていたと言われる伝説の大蛇ヨムンガルド――――北欧神話ではミドガルズ蛇等とも呼ばれるが――――によって初代ゲオルグ王は父を殺され、やがて後の七王家である所の６人の勇士と共にヨムンガルドを討伐したとされる。

だがその際、大蛇ヨムンガルドによって子々孫々まで、第1王子が成人前に死ぬという『ゲオルグの呪い』呼ばれる強力な呪いを掛けられたのだと言う。
この事から、王の選出に於いては呪いの死や、その呪いの死に見せかけた毒殺、陰謀、策謀が飛び交い、ルーンミッドガッツ王国は一時の混乱に陥るのだとか。
さて、ＲＯの世界をこよなく愛する僕でも流石に糞難しい政治戦争にそこまで深い関心を抱くことは無く、またこの呪いや王家に纏わる伝承に関しても話半分、逸話や寓話の類とさして変わらぬ扱いをされているため、正直な話眉唾物の域を出ないのである。

じゃあそんな話すんなって？はっはっは、最初に記した筈だ。
これは僕の見栄を大いに含んでいると。
ぶっちゃけた所、小難しい話を盛り込んでそれらしく物語を彩る為、といってしまえばそれまでである。

さてさて、そんなこんなで自宅に存在する図書の殆どを読み切ってしまった僕は暇をもてあまし始めた。
この歳から体力作りや体作りといった事をし始めると成長時の体の構築バランスを崩すのという話を聞いた事があるのでトレーニングの類は自重している。
そうなると結果的にやる事は１つになるわけだ。

「お父様！今日もお姉さまのお稽古を見学してもいい！？」
「ああ構わんぞ、好きにみるといい！ただまだ参加するのは少し早いがな！」
姉の稽古も１年を経て、基礎である体力作りや素振り等から、体捌き、盾の扱い、剣筋の型等、知識による修練に入っている。
この調子でいくと恐らく選ぶまでも無く姉は剣士、ＲＯで言うところのソードマンへと転職する事になるのだろうと予測する。

ＲＯには現在、剣士（ソードマン）、弓師（アーチャー）、聖職者見習い（アコライト）、魔術師（マジシャン）、盗賊（シーフ）、商人（マーチャント）と呼ばれる最初に選択出来る一次職である六職業が存在し、更にその六職から其々二通りの上位職である二次職に転職する事が出来る。
また特殊一次職として忍者や銃士（ガンスリンガー）、格闘士（テコン）に転職する事が出来る。
テコンに関しては基本の一次職同様に二次職が二通り存在している。
また転生システムと呼ばれるシステムを経て更に高位の職業への転職も可能なのだが、その話はまだ今は伏せておこうと思う。
第一まだ転生を司る女神ヴァルキリーがこの世界にも存在しているのかどうかもわかっていないのだ。
それは時期尚早という物だろう。

そうそう、職業といえば僕達冒険者は基本、一番最初に初心者（ノービス）という職業を経る筈なのだが、４歳になった現在、未だレベルやジョブレベルといった存在を確認するに至ってはいないし、何よりスキルと呼ばれるワードも耳にした覚えは無い。
これはあくまで予想の領域に入るのだが、僕はまだノービスという職業にすら付いていない状態にあるためレベルやジョブレベルといった概念が存在しないのではないかと思っている。
最終手段としては父や母に尋ねる事なのだが、何も情報の無いはずの僕がそんな事を聞いたら明らかに不審に思われるだろう。
だからひとまずは、姉の修練を見学しつつ、学べる技術を理解の上だけでも学んでおこうと、そういうわけなのだ。
「足捌きが甘いっ！！あと二百回繰り返し！！」
「はいっ！！」

それはそうと、父は稽古になると人格が変わる。
普段は親馬鹿ってレベルじゃねーぞこの親父、ってレベルで姉と僕を溺愛し、でれんでれんに甘やかしているのだが、やはり彼も武人である為譲れぬ一線が存在するのだろうと予想する。

だがその喧騒を眺め、体の奥が疼いて仕方がない自分がいる事に気付いて、僕は一刻も早く月日が経つのを願うのだった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

さーて、7歳になりましたよっと。
まずは結論から言うと、姉はノービスになった。
ついでに僕もノービスになった。
どうやらミッドガルドでは一般的に１０歳で冒険者のスタート地点に立つようだ。
１０歳の誕生日の日、姉は父に冒険者の掟や概要を伝えられるべく、呼び出された。
それをどうにか盗み聞きしようとしたのだが、父にあっけなくばれてしまい、使用人達に引き渡される寸前で、僕の嘆願が父に届いた。
「お父様っ！僕はもうお姉様と同じ訓練をマスターして、知識だって大人に負けないくらい持っていると自負しています！僕だって冒険者になる資格はあるでしょう！」
そう、僕は姉が5年間を費やして身に付けた技術を実に2年でマスターして見せたのだ。
そりゃあ姉が訓練しているのを横でずっと盗み見て、自分の部屋に籠っては反復の訓練を行ったりしていたのだから身に付くのが早いのも当たり前だし、何より魂の年齢は既に２５を超えているのだか

ら、その理解力も子供とは段違いである。
実際、姉と模擬戦を行っても、体格をどがえしして圧倒的な腕前を見せていた。
というのもこれには少々裏があるのだが、これには僕がカミサマモドキから貰った能力とステータスに関する諸説が絡んでくる為、説明は後に回そうと思う。
そして父の説得にトドメを指したのは姉本人だった。
「お父様、ウルには間違いなく才能があります。恥ずかしい限りではありますが、私ではもうウルには勝てなくなってしまいました、といっても姉としては誇らしい限りです。そんなウルを差し置いて私だけが冒険者に成ると言うのには納得できません！」
おいおい、僕は転生云々でこんなだから仕方無いとして、１０歳にしてはこの姉、大人び過ぎだろう。
日本だったらこの年齢の子供が自分の下に圧倒的能力差を見せつけられれば嫉妬ないし拗ねたりぐれたり大変な事に成りそうな物だが。
ミッドガルドの人間は精神的な成熟が早いのだろうか。
まぁあれだけ厳しく5年間も修練を積めば成熟も早く成ろうと言う物だし、父や母の素晴らしい情操教育や差別の無い普段の接し方の賜物でもあるのだろうが。
さてそんな姉妹による嘆願を受け、不承不承といった様子で父は僕と姉に冒険者としてのイロハを語った。
まぁそんなこんなで、僕は7歳という例外的な早さで、冒険者としてのスタート地点に着けたのであった。

冒険者としてのイロハ、これを聞いた限りでは、僕にとってのこの世界は一瞬で現実というよりも、むしろＶＲＭＭＯ（バーチャルリアル世界にダイブするタイプのＭＭＯＲＰＧ）に近い物となったのだ。
確かにこれはなんというか、現実離れしているというか、ご都合主義と言ってしまえばそれまでだが、ある年齢までひた隠しにされる

のも納得の内容だった。
父曰く、
「我々がオーディンを主神と祭っているのは二人とも知っているな？その冒険者となった者達はその主神オーディンの加護を受け、神に祈る事で様々な情報を脳内で閲覧できるようになるのだ――――」
という。
そしてその冒険者への認定として、上位職以上の冒険者の承認が必要なのだそうだ。
ちなみに父はソードマンの上位職である騎士（ナイト）であり、母はアコライトの上位職である聖職者（プリースト）であったそうだ。
まさにうってつけと言わんばかりの職業に納得の僕である。
そして神に祈る事で閲覧できる情報とは一般的に呼ばれる２種類の己の強さを示すレベル、ベースレベル（後述ではＢＬｖとする）とジョブレベル（後述ではＪＬｖとする）、また神の分析により自己の能力を数値化しているのだという名目らしいステータス画面、そして冒険者が皆等しく所持する神託を受けたと言われる荷物鞄の中に所持しているアイテムを閲覧、および自由に出し入れ出来る。
またこの荷物鞄は放りこめる物体の総重量的な意味では有限なのだが、体積的な意味ではほぼ無限の構造を持っているという、謎の鞄なのであるのだそうだ。
一節によると、僕達の住む世界であり大陸であるミッドガルドを支える大樹イグドラシルが一年に一定量脱皮の様な形で零す表皮で造られているらしい。
原理等は解明されていないとか。
あっ……圧倒的ッッご都合主義ッッ！！
と言いたい所ではあるのだが、ＲＯという世界を現実として表現する上ではやはり何かと僕にとっての一般的な常識や物理法則には限界があったようだ。
といっても、僕が抱いている常識や物理法則というのはあくまで転生する前の世界に於ける理であり、この世界ではこの超常的な原理

こそが、常識なのであるのだから然程気にする事もない、というよりその常識では有り得ないだろうと言う考え方こそが、狭義的な思考であると言えるのかも知れない。
御都合主義なのではない、これがここでの常識なのだ。
第一そんな世界を支える様な巨大な樹木が存在している時点できっと転生前の世界の科学者達からしたら『有り得ない』事なのだろうから、この世界自体元より『有り得ない』存在なのだ。
つまる所、僕はこの『有り得ない』現実をただ楽しんで受け入れるだけだ。
何せこのＲＯというゲームは回復薬を連打、もといがぶ飲みするようなゲームなのだ。
元の世界の理に縛られたままでは飲むのもすぐお腹一杯になって大変だろうし、数百本ものポーション瓶をどうやって割らずに持ち運べばいいのだという話になってしまう。
ある種色々と解決して安心したくらいだ。
さて、また先ほど話したレベルに関する概要だが、ＲＯの世界にはメインのレベルであるベースレベルと、職業に付随したジョブレベルという物が存在する。
多種多様なモンスターにもベース経験値とジョブ経験値という物が設定されており、二つは別々に上昇して行く。
前述ではＢＬｖは１５０まで開放となっていると説明したが、基本的にＢＬｖは１を開始点として９９までである（例外として１５０まで上がるがそれは後に語ろう）。
またＪＬｖはノービスでは１０、一次職および二次職では５０が最大値となっている。
またＢＬｖアップ時には六つの基本ステータス（後述では基本ステとする）を上昇させる為に必要なステータスポイント（後述ではステＰとする）と呼ばれるポイントが得られる。
またこのＢＬｖアップ時に得られるポイントはレベルに比例して上昇して行くし、基本ステ値が上昇するのに比例して基本ステを１上

昇させるために必要なステPも上昇して行く、という原理だ。
また基本ステは通常最大値が９９となっている（例外条件では１２０が最大値となる）。
さて、簡単にまとめて言えば、ＢＬｖ１→２に上がった時に得られるステPよりもＬｖ１０→１１にあがった時の方がより多くステPを得られるし、基本ステの１つであるＳＴＲを１→１０にするより１０→２０にする方がよりたくさんのステPを消費する、といった具合だ。
またＪＬｖは１つ上昇するごとにスキルポイント（後述ではスキルPとする）を１づつ得る事が出来る。
そしてスキルPを１使う事でスキルを１つ習得、もしくは習得済みのスキルの熟練度Ｌｖを１上昇させる事が出来る。
これも簡単にいうなら、熟練度がＬｖ１０でＭＡＸのスキルが存在したとして、スキルポイントを１０消費する事でそのスキルを熟練度ＭＡＸで習得出来るというわけだ。
例外なく覚えたばかりの段階の熟練度はＬｖ１である。
まぁＬｖ１以上熟練度が存在しないスキルも存在するのだが。
また例外として、クエストスキルと呼ばれるスキルは、クエストをこなす事で習得可能で、スキルポイントを使用しずに習得する事が出来る。
またスキルにはパッシブスキルとアクティブスキルの２種類が存在し、パッシブは自分の任意に関わらず、習得した時点で常時発動し続けるスキルである。
主に、ＨＰ（生命力、０になると多分死ぬ）ＳＰ（スキルポイント、ＪＬｖアップ時に習得出来る物とは違いスキルを使用する為に使用されるＭＰのようなもの）回復力の向上や、物理攻撃力（ａｔｋ）や魔法攻撃力（ｍａｔｋ）や物理防御力（ｄｅｆ）や魔法防御力（ｍｄｅｆ）や回避力（ｆｌｅｅ）や命中力（ｈｉｔ）の上昇、基本ステータスの上昇スキル等々がこのパッシブスキルに該当する。
ようは自己改造スキルである。

またアクティブスキルは自己の任意で発動させるスキルであり、俗に言う必殺技のようなものである。
回復や支援の魔法や攻撃用の技等がこれに当てはまる。
とまぁ、長々と説明してしまったが、これは正直基礎知識中の基礎知識であるため、ＲＯという世界で生きる物語を綴る上ではぜひとも覚えておいて貰いたい概要である。
これに加えてＡＴＫやＭＡＴＫやＦＬＥＥやＣＲＩやＨＩＴについての説明をし始めると諸君らもそろそろ嫌気が刺してくる頃だろうと思うので一先ず基礎知識のお話はこの辺りにして置こう。

まぁようはこのステータス云々の情報が頭の中で閲覧可能になりますよ、というのが冒険者の特典の１つらしいのだ。
ああ、あんまりにも長く説明してしまったために何を綴っていたのか忘れてしまったではないか。
ＲＯ廃人にＲＯの話を聞かされる時がもし諸君らにあったらぜひ注意してほしい。
恐らく往々にしてこの数倍の長さの話を聞かされる事間違いないだろう。
最終手段としては、
「あっ、塾の時間だっ！」
と露骨に話をぶった切るのがお勧めである。
時計を付けていない左手首を指してこれを言えば、どんな鈍い相手であろうともう話を切り上げて欲しいであろうことに気付く筈である。

さて本題に戻ろう。
父にこうして冒険者としてのイロハを教えられ、大樹イグドラシルの脱皮した皮で作られた鞄を１つづつ受け取った僕達姉妹は、一週間の準備期間を経て、ようやく冒険者としての旅に出る事に相成ったわけである。

はてさて、これから綴られるのはそんな二人の姉妹が冒険者として、この神話世界を巡る騒乱に巻き込まれる様な、巻き込まれないような、そんなほんのりどっきりとした冒険の日々を描いた、紀行文のような日記の様な――――何かである。

幼女↓冒険者（後書き）

よーやく冒険やー！！
何から書こうかなー！今からｗｋｔｋ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3908ba/

MMOしんどろーむ　－In Ragnarok Online－

2012年1月10日03時51分発行